

永久歯先天欠如と乳歯晩期残存に対してインプラント治療を行った顎変形症の1症例

○及川 湧基¹⁾, 高野 裕史¹⁾, 中田 憲²⁾, 鈴木 昇建³⁾, 有馬 実咲¹⁾, 今野 泰典¹⁾,
五十嵐 秀光¹⁾, 福田 雅幸¹⁾

¹⁾秋田大学医学部附属病院歯科口腔外科

²⁾市立秋田総合病院歯科口腔外科

³⁾大館市立総合病院歯科口腔外科

A case of jaw deformity treated with dental implant for congenital anodontia of permanent teeth and prolonged retention of deciduous teeth

○OIKAWA Y¹⁾, TAKANO H¹⁾, NAKATA A²⁾, SUZUKI S³⁾, ARIMA M¹⁾, KONNO Y¹⁾, IGARASHI H¹⁾, FUKUDA M¹⁾

¹⁾Department of Dentistry and Oral Surgery, Akita University Hospital

²⁾Department of Dentistry and Oral Surgery, Municipal Akita General Hospital

³⁾Department of Dentistry and Oral Surgery, Odate Municipal General Hospital

I 目的: 永久歯の先天欠如および乳歯晩期残存症例では、適切な咬合支持が得られず、それに伴う不均衡な咬合により残存乳歯脱落の恐れがあり、また、咀嚼能力の機能低下を引き起こすことが懸念される。本症例では、顎矯正手術とインプラント治療により咬合支持を付与した結果、残存乳歯は保護され、良好な機能回復が得られたのでその概要を報告する。

II 症例の概要: 患者は23歳女性。ものが咬みにくいことを主訴に2012年9月、当科へ紹介受診となった。既往歴に精神発達遅滞、多発奇形、心電図異常、難聴があった。上顎両側1番以外の永久歯は先天欠如であり、上顎両側CからEおよび下顎は全ての乳歯が晩期残存していたが下顎乳前歯は動揺を認めた。咬合は前歯部、臼歯部ともに反対咬合で骨格性の下顎前突症であった。外科的矯正治療の適応と判断し、近医矯正歯科医院へ紹介、術前矯正終了後の2013年12月に両側下顎枝矢状分割術を施行した。その後、咬合支持回復および残存歯保護のため、残存乳歯の保存治療および上下顎両側6番相当部にインプラント治療を行う方針とした。2014年6月にインプラント体(MkIII Groovy RP φ3.75x11.5mm, Nobel Biocare, Klotten,

Switzerland)4本の埋入術、および2015年1月に二次手術を施行した。同年4月、上部構造を装着した。

III 経過: 治療終了後6年経過しているが、インプラント体埋入部に異常所見は認められず、パノラマエックス線写真においても重度の骨吸収像やインプラント周囲炎等の異常所見は認められなかった。残存天然歯においても機能的・審美的に問題を認めず、経過良好である。

IV 考察および結論: 永久歯の先天欠如を伴う乳歯晩期残存症例では、顎骨成長に合った適切な咬合の獲得が困難である。また、顎変形症による不正咬合を伴う場合、不適切な咬合の結果、残存乳歯に過重な負荷をもたらす、脱落の原因となりうる。それに伴い、咀嚼機能や審美性が著しく損なわれる。本症例では、顎矯正手術後に上下顎両側6番へのインプラント体埋入を行った。これにより、適切な咬合支持の獲得、顎位の安定、残存乳歯の保護、咀嚼機能の回復が得られたと考えられる。今後も定期的な経過観察を行い、管理に細心の注意が必要と考える。(治療はインフォームドコンセントを得て実施した。また、発表について患者の同意を得た。)

長期的な経過を経た上顎前歯部への埋入2症例

○浅香 淳^{1,2)}, 村山 大悟^{1,2)}, 関根 大介^{1,2)}, 佐々木 秀人^{1,2)}, 慶野 大介^{1,2)},
馬場 恵利子^{1,2)}, 萩原 寛司^{1,2)}, 渡沼 敏夫^{1,2)}

¹⁾特定非営利活動法人埼玉インプラント研究会

²⁾関東・甲信越支部

Two cases of implantation in the maxillary anterior teeth after a long course.

○ASAKA J^{1,2)}, MURAYAMA D^{1,2)}, SEKINE D^{1,2)}, SASAKI H^{1,2)}, KEINO D^{1,2)}, BABA E^{1,2)},
HAGIWARA H^{1,2)}, WATANUMA T^{1,2)}

¹⁾Saitama Implant Association incorporated nonprofit organization

²⁾Kanto-Koshinetsu Branch

I 目的: 上顎前歯部の欠損補綴治療のなかでインプラントによる治療はとて有用である。しかしながら、過去に受けた治療や疾患により欠損部位の骨の状態は様々である。今回、美容外科での手術により結果として骨が厚くなった症例、嚢胞摘出によって非常に骨が薄くなった症例を経験した。2症例ともに安定した予後であったため報告する。

II 症例の概要: 症例1、患者は68歳男性。2017年3月に上顎前歯部の機能、審美的改善を主訴に来院。20年ほど前に美容外科にて上顎骨の切除術を受けている。同部の状況を精査して治療計画を立案し、相談、同意のうえでインプラントによる治療を行った。2017年5月にインプラント体(BLTφ3.3x12mm, Straumann, Switzerland)を埋入し、二次手術、プロビジョナルレストレーションを経て2017年9月上旬構造を装着した。症例2、70歳男性。2017年7月に前歯の審美改善を主訴に来院。欠損部は30年前に嚢胞を摘出してきている。治療計画を立案し、相談、同意のうえでインプラントによる治療を行った。2017年9月インプラント体(BLTφ3.3x14mm, Straumann, Switzerland)を埋入し、二次手術、プロビジョナルレストレーションを経て2018年1月に上部構造を装着した。

III 経過: 症例1は2021年7月(3年10カ月後)、症例2は2021年7月(3年6カ月後)、口腔内に異常所見は確認されずレントゲン写真においても顕著な骨吸収像やインプラント周囲炎等の異常所見は観察されなかったことから経過良好と判断した。いずれの症例も患者は、機能的・審美的に十分満足している。

IV 考察および結論: 症例1では美容外科での手術により結果としては非常にインプラントに適した骨の状態であった。美容外科への通院歴があることから審美的な要求が非常に高いことが予測された。しかしながら術前に慎重に時間をかけて説明をしたこと、想定通りの結果となったことで患者の高い満足度が得られた。症例2では骨造成をしてインプラント手術をする方法もあったが、1本のカンチレバーであれば審美的にも機能的にも問題ないという結論でこの方法となった。また、患者の身体的な負担や時間的な負担を最小限にできたことは今回の治療の最大のメリットであったと考えられた。(治療はインフォームドコンセントを得て実施した。また、発表についても患者の同意を得た。)